

最優秀賞

地域民話研究部門（団体）

こんなんあったけん調べてみた !!

—久谷地区・砥部町の伝承たち—

愛媛県立東温高等学校

郷土芸能部

（小椋詠亮、山口翔聖、渡部良磨、只木克己、石田咲良）

応募の動機

愛媛県松山市の郊外にある久谷地区は中山間地域にあり、少子高齢化が進んでいる。この地区には、お遍路さんや狸にまつわる伝承が数多くあり、この伝承を掘り起こすことによって久谷地区を活性化できないかと考え、久谷地区の伝承調査を開始した。1年次、2年次、3年次と活動報告をコンテストに出品し、1年次は落選、2年次には佳作、3年次には最優秀を受賞することができた。

研究レポート内容紹介・今後の課題

私たち東温高等学校郷土芸能部は、久谷地区に伝わる四国遍路の元祖衛門三郎に関する「衛門三郎伝説」、狗神刑部狸を頭目とする「八百八狸伝承」、砥部地区に伝わる楠木正成を摂津湊川で討ち取った豪勇大森彦七に関する「大森彦七伝承」等について調査した。

調査方法は、「川内町誌」・「重信町誌」・「砥部町誌」等の文献資料に当たるとともに、お遍路さん、神社の宮司さん、神社の祭りの参拝者、狸伝承の研究者等及び、久谷中学校の一年生89名にアンケート調査を実施した。

調査の結果、「衛門三郎伝説」の最古の文字記録が永禄十年に河野通宣が作成させた、石手寺刻板（木の板に文字を刻んだ記録）であることが分かり、病に臥せていた河野通宣期に、河野氏家中を動かしていたのが、久谷地区の国人領主平岡房実であったことから、房実が久谷地区にあった衛門三郎伝承を河野氏の本拠道後湯築城に伝え、衛門三郎が河野の家に生まれ変わったとして、河野氏と衛門三郎及び弘法大師を結びつけ、河野氏の伊予における宗教的支配の正当性を打ち立てた可能性があるかと推測した。また、「八百八狸伝承」は、享保期に松山藩内で起こった家老同士の権力争いが藩主毒殺計画に置き換えられ、享保の大飢饉時に起こった久万山騒動という惣百姓一揆の群れが、狗神刑部狸の眷属である八百八狸のモデルであることが分かった。この点から、久谷地区に伝わる民間伝承の裏には歴史的事実が隠されていることが分かった。

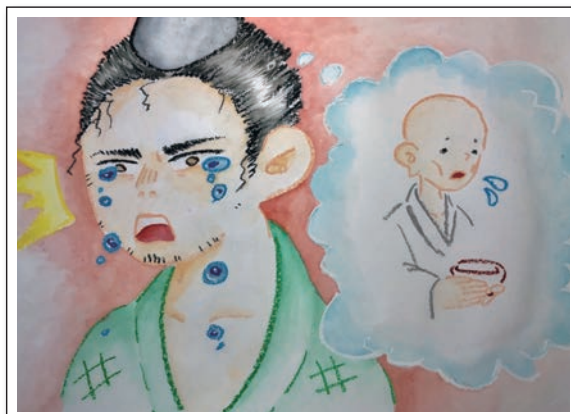
また、地域の方々や久谷中学校の生徒から取ったアンケート結果から、久谷地区の人たちは、地元の伝承である「衛門三郎伝説」について詳しく知っているが、隣の砥部地区の伝承である「大森彦七伝承」については知らないことが分かった。逆に、砥部地区の人たちは、「大森彦七伝承」については知っているが、「衛門三郎伝説」については知らないと答えた方が多かった。このことから、伝承は、現在でも、口伝によって、狭いコミュニティの中で伝えられていることが分かった。

私たちは、この研究を元に、久谷地区の中学生に久谷への愛着心をより高めてもらおうと考え、「衛門三郎伝説」を紙芝居にして、一年生の総合的な学習の時間に体育館で披露した。

アンケート結果は、「大変面白かった」という回答が多くおおむね好評であった。今後も、地域に眠っている伝承を掘り起こし、伝承を通して地域の皆さんに元気になってもらう活動を続けていきたいと考える。



松山道後石手寺の衛門三郎像



松山市立久谷中学校で披露した紙芝居

『今昔物語集』卷三十第十の意識的欠字部分について
～舞台は古代下野国塩谷郡だった～栃木県立矢板東高等学校
リベラルアーツ同好会(池亀優作、安達奏音、石崎莉菜、菊地康平、坂巻朝香、佐藤乙羽、
佐藤恵、鈴木野乃花、相馬優吾、星野桃子、増子晃希)

応募の動機

私たちが通学している栃木県矢板市には石碑石仏が多く残っている。一つ一つ形が違っているが、そのような違いにも、そこに存在する意味も知ることがなかった。授業で黒曜石やナウマンゾウの化石が矢板市からも出土していることを聞いて、もっと地域の歴史に触れたいと思うようになった。それが今回の研究の出発点である。

研究レポート内容紹介・今後の課題

『今昔物語集』卷三十第十は下野国の馬を題材にした物語であり、この物語には郡の明記がなく意識的欠字部分となっている。今回は、その意識的欠字部分に該当するのが現在の矢板市を中心とする塩谷郡であったという可能性を考察した。

まず、史資料をもとに古代塩谷郡と馬との関わりについて考察した。史資料から、古代の塩谷郡には七郷あり、そのなかから山上郷と片岡郷の二郷が現在の矢板市に該当することがわかった。そのうち、山上郷はその言葉から山を中心にした地名だと考えられ、矢板市の高原山または堀江山がその候補にあがる。高原山は黒曜石原産地遺跡群が発見されていて、古代において他地域との交易があったと考えられる。また、堀江山付近では星宮神社を祀る集団が奈良時代には形成されており、人や動物の往来があったと推測できる。これらの地域で輸送手段として馬などが使用されていたと考えられ、この2つの山を中心として古代の矢板市は馬と関係の深い地域だったと推測される。

次に、矢板市の民話をもとに、古代の矢板市を中心とする塩谷郡と馬との関わりについて考察した。民話を読み解いていくと、矢板市の民話の一つである「高原山の盗賊退治」には、同様の民話が2話見つかるなど不可解な点があることがわかった。これらの話には、共通する点が多く見られることから、時代が経つにつれて、民話どうしが混同してしまったと考える。また、高原山にある八海山神社については、『矢板市史』にも記載が無く、不明な点が多い。八海山神社と民話の中心人物である藤原房前との関係性が分かれば、矢板の民話の方が時代設定が早いと、これらの類似した民話の出発点と考えられる。馬との関係を見ても、矢板の民話に登場する馬館のみ現在も地名として残っていることや、矢板市の寺山観音寺に伝わる仏像からも、馬との関係の深い土地であったと推測される。

最後に、馬頭観音像を中心とする石碑石仏や神社仏閣から馬との関わりについて考察した。現在点在する馬頭観音のほとんどが近世以降のものであるため、古代との関連はわからなかった。また、神社仏閣では、その地に伝わる民話・伝承を参考にしたときに古代からの馬への信仰の厚さがうかがえた。特に矢板市玉田の勝善生駒神社は、古代塩谷郡から矢板の人々の馬の神様への信仰が現在も続いていることを物語っている。

本研究では、以上に述べたように史資料からみる古代塩谷郡と馬との関わり、民話からみる古代塩谷郡と馬との関わり、馬頭観音像はじめ石碑石仏および神社仏閣からみる古代塩谷郡と馬との関わりという3つの観点に適宜フィールドワークを加えて、『今昔物語集』卷三十第十の意識的欠字部分が現在の矢板市を中心とする塩谷郡であるという可能性を考察した。その結果、古代塩谷郡は馬との関わりの深い地域であり、『今昔物語集』卷三十第十の意識的欠字部分が塩谷郡である可能性が十分にあることがわかった。

今回、古代塩谷郡を調べるにあたってフィールドワークを積極的に行い、新しい考え方や発見が生まれた。このように、机上の学習だけでなく実際に足を運んで学習することが重要であると思い、これからは積極的にフィールドワークを行ってきたい。今後もこのような活動を通して、地域に根付いている文化や歴史に関することを調べていきたいと思っている。



馬頭観音の現地調査



地形図を活用した民話の考察

「謝文旦」は実在したのか ～阿久根から世界へ：海の道の歴史をたどって～

鹿児島県立鶴翔高等学校
地域文化研究同好会
(平田あや、倉津優奈)

応募の動機

鹿児島県阿久根市は、「文旦（ボンタン）」という柑橘の特産地として有名である。

この文旦は、阿久根に漂着した中国船の船長「^{シェイフンタン}謝文旦」に因んで名づけられたという。

しかし、昨年台湾を訪問した際、台湾にも「文旦」という名前の大型の柑橘が栽培されているということを知った。そこで、そもそも謝文旦という人物は本当に実在したのか明らかにしようと調査を進めた。



阿久根特産のボンタン

研究レポート内容紹介

(1) 文旦伝来に関わる書物の調査

——江戸時代、阿久根に漂着した中国の難破船を阿久根の人々が助けた。そのお礼として謝文旦という人物が中国のミカンを与え、それを謝文旦の名前から文旦と呼ぶようになった。

私たちはこの民話の由来について、『三国名勝図会』、『阿久根郷土史』という書物の記述を調べることにした。この二つにはいくつかの差異があったが、文旦を受け取った人物の原田喜右衛門という唐通詞はどちらにも登場している。

(2) 文旦のルーツを探る調査についての聞き取り

阿久根文旦のルーツについて、地元のロータリークラブが調査を行っており、その調査内容について聞き取りを行った。その際にいただいた中国や台湾の農業資料によると、中国では一般に文旦は「柚」と呼ばれているが、中国大陆南部には「文旦」と呼ばれる「柚」があり、それが台湾にも伝わったと言われている。そうすると、そもそも「文旦（柚）」と呼ばれていたものが阿久根に伝わってきた、と考えるほうが自然なのではないか。

(3) 文旦の語源についての調査

文旦の語源を様々な事典や辞典で調べた。やはり、古来中国では「柚」という呼び名が一般的であった。中国南部の方言として「文旦柚」という呼び名も見られた。そうすると「もともと中国南部では文旦と呼ばれていたミカンが阿久根に伝来した」と考える方がきわめて自然だろう。よって残念ながら、「謝文旦」は実在しなかったと私たちは結論づけた。

(4) 追加調査

「謝文旦」がいなかったとしても、「文旦」はなにがしかの手段で伝わったはずである。そこで、阿久根と世界とのつながりをキーワードに、資料を見直し、また阿久根市の郷土資料館を訪れて、追加調査を行った。

- ① 室町時代：罷里「波留」
- ② 戦国時代：とっぼどんの墓と阿久根砲
- ③ 江戸時代初め：唐通詞の河南源兵衛、密貿易
- ④ 1700年代中頃：唐通詞の原田喜右衛門



密貿易が行われていたという桑島を望む

今後の課題

謝文旦は実在しなかった、ということが私たちの結論である。しかしこの研究から、古い時代、阿久根が海の道へ通じる国際的な港だった一面も見えてきた。

今後については、私たちの結論を証明する資料をさらに調査していきたいと考えている。まず、「謝文旦」が実在しなかったという確実な証拠を探し、そして「謝文旦」という名前がどういった経緯で出てきたか、阿久根に中国の船が漂着したという記録がないかといった点について調査していきたい。

昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造に関する一考察

静岡県立韮山高等学校

課題研究班

（荻野智也、榊原尚子、古屋美菜、前田陽菜乃、三津間綺香）

応募の動機

私たちは、「課題研究」の授業を通して、昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造について研究してきました。伊豆の昔話を収集し、話の型ごとに分類して、日本の一般的な昔話と伊豆の昔話を比較しました。研究を進めていくなかで、外部から客観的な評価を受けることでより研究内容を深めたいと考え、貴コンテストに応募いたしました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

臨床心理学者の河合隼雄（1982）『昔話と日本人の心』によれば、日本人に親しまれてきた昔話には日本独特の、西洋とは違う自我の意識が現れ、構造的にも違いがみられるとされています。この論文は、前述したことを前提にして、昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造について、『うぐいすの里』『鶴女房』『火男』の3作品に焦点を当てて研究し、その際に立てた仮説、研究目的、得られた結果、考察をまとめたものです。以下に論文の内容を簡潔に示します。

まず、研究する上で、次の2つの仮説を立てました。1つ目は、伊豆地方の昔話にも、日本の昔話と同様に日本人特有の精神構造がみられるであろうということです。2つ目は、伊豆の昔話には、風土などに基づき、一般的な日本の昔話とは構造の違いがあるものも存在するのではないかとということです。これをもとに、全国の昔話と伊豆の昔話を比較した結果、『うぐいすの里』では、物語の最後に去る鶯が蛇に置き換えられている物語が多くみられました。『鶴女房』では、禁止をする者と破る者の立場が逆でした。『火男』では、類話である「継子と継母」の話自体が多く存在していました。また、「継子と継母」の典型とは逆の話がいくつかみられました。

この結果から、伊豆の昔話に見られる伊豆の人々の伝統的な精神構造については、自然に対しては無力さを感じており、自然への敬意、理不尽を受容する心、万物を同等とみなす心が大切にされていることが読み取れました。昔話を読み聞かせることで子どもたちの自我形成において育まれるものは、外国人は、ロマンを持ち自立的で積極的な姿勢や行動であるのに対し、日本人は、自然を含む周囲との調和を図っていこうとする姿勢や行動であることがわかりました。伊豆の人々は、すべてを受容していく姿勢や行動の一面性が育まれていくことが読み取れました。

最後に、私たちが研究を行ってきた中で2つの課題が見つかりました。1つ目は、十分な数の研究資料を集められなかったことです。研究資料として伊豆の昔話の収集量を増やすことで研究の幅を広げていこうと思います。2つ目は、実地調査を行うことです。実際に足を運んで目で確かめることによって、より確実に深い研究となるように努めていきたいです。

また、昔話の根源となっている『古事記』をはじめとした歴史書などと絡めた研究を行っていくと、より深く掘り下げた研究が行えると思いました。



受賞を聞き喜ぶ班員



論文作成中 語り合う班員

山梨県立甲府第一高等学校

探究2班

（川崎葵衣、志村ひまり、赤松明、齊藤優美）

応募の動機

民話とは民衆の中から生まれ、語り継がれてきた説話のことである。現在、民話は危機に瀕している。民話を知らない子供たちが増えてきているのだ。ある調査によると、「桃太郎が持っているものは何か？」という質問の正答率が減少している。また、同学年である二年生に行ったアンケートで、民話に興味がないと答えた人の数が多かった。しかし、民話が好きと答えた人の数も多く、我々が民話について調査し、それを伝えることによって、民話に興味を持つ人が増えるのではないかと考え、その結果をまとめたものを応募することにした。

研究レポート内容紹介・今後の課題

探究方法

- ・山梨県の民話について調査する。
- ・隣県の民話、研修旅行で訪れた台湾の民話を調べる。
- ・共通点、相違点などを調べ、考察する。

探究結果および考察

i 結果

- ・山梨県の民話と隣県の民話を調査したところ、同じような系統の話や、ほぼ同じ話が複数見つかった。
- ・台湾の民話と比較したところ、完全に同じような内容というような話はなかったが、共通点がみられた。台湾とは文化の違いというべき民話の違いもみられた。



台湾研修旅行にて、台湾の高校生の前で研究発表

ii 考察

A) 昔の日本人の共通意識

- ・継子がいじめられながらも成功する物語が多い。日本人は継子ものが好き。なお、台湾でも共通。
- ・非常に大きなおならをする人が多い。日本人はおならを面白がっていた。
- ・娘を動物の嫁にやれば様々な問題が解決する。その際に末娘だけが了承することから、末娘は優しいという認識がある。
- ・村の問題はお年寄りの知恵で解決する。お年寄りや親を大事にするべきという考えがある。
- ・淵の中には龍が住んでいたり、竜宮城があったりする。日本人は淵の中には不思議なものが多いと考えていた。
- ・河童は毎回失敗し、村の人々に懲らしめられて改心する。日本人は河童を恐れるのではなく面白がっていた。

B) 日本と台湾の民話の共通点

- ・日本の「河童」と台湾の「モシナ」は同じ系統のものである可能性がある。
- ・台湾の人も継子ものが好き。
- ・川から流れてきた子供が活躍。例：日本「桃太郎」、台湾「天童」
- ・ヘビ、カエル、サル等動物と結婚する話がある。

C) 日本と台湾の民話の相違点

- ・中秋節（八月十五夜）は台湾の一大イベントで、休日にもなっている。中秋節にまつわる話が多くみられた。
- ・日本には月に関する民話はほとんど見られないが、台湾には月に関する民話が多くある。月を大切にするのは中国の影響だと思われる。

D) 河童とモシナに関して

- ・モシナは、容姿や行動で河童に似ていたが、河童のような滑稽さはなく、台湾では恐ろしいものとして映画化もされていた。また、モシナのほかに世界各地で同じような妖怪がいることが分かった。
- ・河童に関しては、川から流れてきただけでなく、竹取物語のかぐや姫のように、罪を犯して天から地上に落とされたという共通点があった。この話には桃太郎のように鬼退治をする場面はない。拾ってくれた夫婦を大切に世話し、彼らが亡くなった後お墓を建てる。ここには儒教的な考えがみられ、中国の影響を受けていると考えられる。

結論及び今後の展望

今回の調査で山梨の民話と日本の中での民話や台湾の民話とのつながりが明らかになった。今度はさらに、山梨の近県だけでなく、日本国内での遠く離れた地域の民話についてさらに詳しく調べていこうと考えている。また、今回内容面のみ共通点、相違点であったので、それ以外の観点からも調査を進めていきたい。

さらに、今回調査したことを様々な人に伝えていきたいと考えている。特に研修旅行で交流した台湾の高校生の方々とお互いの民話を共有できる機会がもてれば、と考えている。

日本人と「桜」の伝説について

愛媛・済美平成中等教育学校 4年
砂野光咲

応募の動機

私は小学生の頃、「うば桜伝説」という伝説を初めて耳にしました。特に伝説に興味がなかった私は、中学2年の冬に、「うば桜伝説」の話を祖母としたことがきっかけで再びそれを思い出し、「うば桜伝説」をテーマに。そうして論文を書き上げた後、このコンテストの存在を知り、応募を決めました。

研究レポート内容紹介

県内の桜の伝説（十六桜伝説・薄墨桜伝説・うば桜伝説・お姫桜の吉凶占い）及び県外の桜の伝説（血脈桜・血桜・世間桜・世の中桜・はなさかじいさんの昔話）を調べ、共通点を探した結果、桜はこの世の超次元な人と人間を繋ぐ役割があると信じられてきたこと、伝説には時代と共に変わりゆく性質があるということが分かりました。このことから、伝説は、昔の日本人から受け継がれてきた思想のほんの一部分に触れることが出来るものであるといえます。また、「花咲爺」について述べた柳田国男は著書で、元は山の神様、神の使いである犬の両者についての民話だったのに、近世にかけて童話化されるにつれて、内容が物語の面白さを重視したものに移り変わっていると述べました。伝説は、昔の人の精神や思考に限りなく近づける装置である一方で、現代人に都合の良い解釈となるように中身が改変され、後には一度聞いただけでは何を伝えたかったのか分からないといった事態を引き起こしてしまう存在でもあります。

今後の課題

伝説を理解することは、私たちが、自分自身について深く知ることと同義です。これが伝説の魅力の正体であると私は考えました。しかし、多くの人々は伝説を調べることもなく、また興味さえありません。それは、伝説の知名度から見て取れます。新しいものにばかり目がくらんで、自分の足元、つまりは根底にある思考回路について全く顧みないというのは、とても危険な行為であるし、日本人として悲しい行為です。私は、伝説の持つ神秘的な魅力についても多くの人に味わってほしいですが、それ以上に、与えられている素晴らしい権利を自ら手放してしまっているという危機感にも気付いてほしいと思います。それゆえ今後の課題としては、伝説を多角的に見つめ、次世代に伝えていくだけでなく、伝説・伝承の「知名度」についても焦点を当て、更に研究を進めていきたいと思っています。



大宝寺にあるうば桜像



うば桜外観

応募の動機

地域の民話について調査を始めたのは、国際地理の授業で課題として出されたことがきっかけだった。当初は学校の課題として取り組んでいたが、次第に楽しさを見出すようになり、最終的には好奇心の赴くままに楽しんで学ぶことができた。

研究レポート内容紹介・今後の課題

1. 概要

今回私が調べたのは、伊豆半島に由来する「河童の甕」という民話だ。調べていくなかで、民話は様々なものとなつていくことでその存在を広め、次の世代へと語り継いでいくことが分かった。そこで、本稿では、民話との「つながり」というキーワードを設定し、それに基づいて伊豆の民話の現状と課題を探っていく。

2. 調査方法

下調べをしているうちに実際に民話の舞台に足を運びたくなったため、伊豆半島で一泊二日の現地調査をした。訪問先は、「河童の甕」がある栖足寺、栖足寺から帰る途中にあった小杉原、そして松崎町役場の三か所だ。栖足寺の住職をはじめとする町の人々に聞き込み調査を行った。

3. 四つのつながり

現地調査の中で、私は民話を取り巻く四つの「つながり」を見つけた。

一つ目は、栖足寺と民話のつながりだ。「河童の甕」は、栖足寺というお寺の和尚さんと河童の話だ。約300年前の和尚さんと河童の「つながり」の証が、「河童の甕」だったのだ。

二つ目は、栖足寺と参詣者のつながりだ。栖足寺では、参詣者が「河童の甕」についてよく知れるように充実したギャラリーが設けられている。また、参詣者を増やす工夫として、近年の御朱印集めブームに合わせて数十種類の御朱印のデザインが並べられていた。

三つ目は、栖足寺と地域のつながりだ。ご住職は、地域の全住民に河童の民話を伝えることが目標だとおっしゃっていた。そのために、お寺でイベントを行ったり小学校を訪問したりして、地域の住民に民話を広めているそうだ。

四つ目は、栖足寺と全国のつながりだ。栖足寺では、伊豆だけでなく全国の人に参詣してもらえよう、ホームページやFacebookなどのメディアを活用している。民話を英語で紹介しているページもあり、民話の伝承に力を入れていることが良く分かった。

このように栖足寺では、参詣者、地域、その他多くの人々とのつながりを強めるための工夫があちこちに凝らされている。そして、彼らが栖足寺とつながることは、彼らと「河童と甕」の民話をつなげることを意味しているのだ。つまり、民話は栖足寺の力を借りて、間接的にその存在を広めているといえる。

4. 課題

ご住職は、若者の参詣者が少ないことが課題だとおっしゃっていた。栖足寺はFacebookを使って情報を発信しているが、その利用者数は10代、20代を中心に年々減少している。そこで、InstagramやTwitterなど若者の利用者が多いSNSを駆使することで、高齢化による参詣者の年齢層の低下に対応し、未来を生きる若者に民話を語り継げると私は考える。

5. 感想

民話の調査を通して、古くからのものを残すためには現代の技術を取り入れることが有効であり、それらを如何に使いこなせるかが今後問われていくのだと感じた。

また、フィールドワークをすることで生きた情報を集めることができたので、沢山の質問に丁寧に答えてくださったご住職に、とても感謝している。これからも、栖足寺が、そして「河童の甕」が、つながりの輪を広げていってほしい。



栖足寺の石柱



河童の甕ギャラリー

オランダ観音さま ～馬が繋いだ流山の物語～

千葉・流通経済大学附属柏高等学校 2年
坂 入 茉 緒

応募の動機

選択国語という授業で自分の地元の文化や民話を調べる機会があった。そのとき、はじめて流山市に民話があると知った。中でも興味を持ったのは馬に関する民話だ。市内の駅には馬のオブジェがあり、民話と関係しているのではないかと思い、研究を始めた。夏休みを利用して研究を深め、コンテストに応募した。

研究レポート内容紹介・今後の課題

千葉県流山市には「オランダ観音さま」という民話がある。江戸時代初期の頃、小金牧に気の荒い馬がいた。オランダから来たその馬は村になじまず、野馬土手を飛び越えて田畑を荒らしたり、人に噛みついたりして村人を困らせた。みかねた牧士はオランダ馬を鉄砲で撃ってしまう。村人は異国の地で亡くなったオランダ馬を哀れみ、馬頭観音を建立して馬の霊を慰めた。村人を困らせたにも関わらず、1頭のオランダ馬のために馬頭観音を建て、民話として残したのはなぜか疑問に思った。そこで2つの問いを立て、調査を行った。

1. 「オランダ観音」が民話として残されているのはなぜか。

まず、現在のオランダ観音はどのように残されているのかを調べた。オランダ観音までの道は舗装され、お菓子や水がお供えされていた。今でも大切に保存されているが、鳥居や看板は無くなっており、地域の中での歴史的価値が下がっていると考えられる。民話として残ったのは馬による被害があまりにも大きかったこと、あるいは民話のような出来事が日常的に起こっていたことが理由だと考える。そこで馬頭観音を立て、民話として語り継ぎ、人々の記憶から忘れられないようにした。

2. 馬は流山市にどのような影響を与えたのか。

始めに、現在残っている市内15か所の野馬土手を調査した。綺麗に残されている土手もあったが、崩されて住宅地になっていた土手が多かった。小金牧についての知識のある人が少ないことが原因だと考える。現在では市の境界やバス停になっている土手もあり、間接的に馬と関わり合いながら生活している。また、馬をきっかけに福島県相馬市と姉妹都市になったり、馬のオブジェが公園や駅構内に置かれたりしている。牧があった時代、馬と村人はともに生活していた。そのため、村人の生活の中に野馬土手を作ること、直すこと、勢子として働きに出ることが生活の一部になっていた。

今後の課題は、「オランダ観音さま」などの民話や野馬土手を地元の人に知ってもらうことだ。私自身、研究をするまで民話や野馬土手の存在を全く知らなかった。まずは、家族など周りの人に伝えていくことから始めたい。また、伝承すべき歴史的遺産は後世に残し伝えていくために保護されることが多い。しかし、遺産そのものを活用し、歴史を肌で感じる機会を作ることでもあると思う。次の機会には、流山市内の正確な野馬土手マップや野馬土手と直接触れることができるような場所を作りたい。



オランダ観音



現存している野馬土手（松ヶ丘の土手）

北条実時とウナギ井戸伝説

神奈川・鎌倉女子大学高等部 2年
田 中 美 衣

応募の動機

夏休みの課題としておこない応募しました。北条実時とウナギ井戸伝説を選んだ訳は、近所に北条実時と関係のあるお寺が存在し、北条実時とは一体どんな人物なのか、何をしたのか、気になったので調べてみることにしました。ウナギ井戸伝説は、北条実時について調べていくに連れてその伝説の存在が露わになったので、内容は勿論どんな話なのかも全く知らなかったので興味が湧き、その伝説も調べました。

研究レポート内容紹介・今後の課題

北条実時は金沢文庫を創建し、六浦荘金沢に在住しました。過去に実時が読んでいた政治・法制・軍学などの蔵書たちが、鎌倉から金沢の居館に移されたことが、金沢文庫誕生の基礎となりました。実時を調べていくうちに私は、ある伝説に出会いました。その伝説の名前は「ウナギ井戸伝説」です。

北条実時が六浦の別荘に来ていた時、風邪をひきました。熱が高く、幾月経っても全く良くなりませんでした。ある夜、実時の夢枕に紀伊国（現：和歌山県）那智山の青岸渡寺の御本尊如意輪観音が現れました。如意輪観音は実時に対してこう言いました。「汝の病気はこれより西北に、那智山というところあり。そこにウナギ井戸という井戸がある。この井戸の水を飲めば、汝の病気は直ちに全快する。」というお告げを聞きました。実時が家来を調べさせると、釜利谷に有名な井戸があることが分かり、家来にその水を汲んでくるように告げました。家来がその井戸を見つけて中を覗くと、大きなウナギが井戸の底にいました。家来はそのウナギの住む井戸の水を持って帰り、実時に飲ませたところ不思議にも熱が下がり、元気を取り戻したそうです。それからというもの、この井戸を如意輪井戸、もしくはウナギ井戸と呼ばれるようになりました。

私はこの伝説にまつわる書物を読んで、疑問に思うところがありました。

疑問① 釜利谷に那智山や能満寺は存在していたか、如意輪観音を祀っていたのか。

答え① 那智山は存在し、能満寺もあった。しかし、如意輪観音は祀っていなかった。那智山は文政期には、夏山という地名に変わっていた。また、本尊は虚空蔵菩薩なので如意輪観音は祀っていないことが分かった。

疑問② 笹下、釜利谷、どちらが本物のウナギ井戸か。

答え② 両井戸にもウナギ井戸と呼べる要素があるので、どちらが本物のウナギ井戸か一概には言えない。「鰻の井の縁起」によると、「是地より西北の間に当たり二里余りの里に腐れ井あり」とあるので、是地は金沢の館なので多分称名寺から計算することになり、笹下とも、釜利谷とも書いてないので、不明という結論に至った。

私は今まで、こんなに時間をかけて調べたことがなくて、ここまで調べられた事にとっても驚いています。実時が創建した称名寺は、廃寺の危機にまで追い込まれましたが、人々の支えで復興が可能になり、現存する寺院になりました。あの時、人々の支えがなかったら、きっと称名寺は私たちに知られることなく消えていったことでしょう。

ウナギ井戸や釜利谷の那智山と能満寺について調査した時はまつわる書物が無く、レポートが進まない日もありました。図書館に通い、質問し、区役所に問い合わせし、求めている答えにたどり着けたとき、達成感に満たされました。本当に諦めないで良かったと思いました。

今後の課題として、あまりにもマニアックな伝説だった為、あまり知っている人がいなかった。ウナギ井戸伝説を沢山の人に伝えていきたいです。



鰻井戸 1



鰻井戸 2



北条実時の墓

義経伝説と白旗神社

神奈川・鎌倉女子大学高等部 2年
中野亜美

応募の動機

夏休みの課題としておこない応募した。私は毎年夏になると友達と白旗まつりに行っている。たくさんの屋台と地元の人が集まる大きなお祭りである。中学校の授業で「源義経に関わるすごい神社」ということを知り、源義経と白旗神社には親近感を持っていたが、今回、源義経と白旗神社と関わりについて調べることにした。

研究レポート内容紹介・今後の課題

藤原秀衡の庇護を受けた源義経は、秀衡が生きている間は安泰であった。しかし、秀衡の死後、息子の泰衡は父ほどの器量を持った人物ではなく、それを見抜いた義経の兄：源頼朝は泰衡に圧力を加えていった。頼朝の圧力に抗しきれなくなった泰衡は、ついに文治5年（1189）閏4月30日、義経を襲撃した。これによって義経は衣川の高館で自害し、31歳という若さでその波乱の生涯を終えたといわれている。泰衡の使者が、義経の首を持参して鎌倉の腰越に到着したのは、義経が自害してから既にか月半近くが経過した6月13日のことであった。義経の首は、本来、頼朝によって検分されても良いはずのものであった。しかし、頼朝は腰越には出向かなかった。『吾妻鏡』には、その後、義経の首に関する記述はない。頼朝が後日、義経の首と対面することもなかったのである。頼朝は鶴岡八幡宮が祀られている鎌倉の地に「穢れ」を持ち込まないため、首実検によって死の「穢れ」に触れることを極力避けたのではないかと考えられている。腰越の浜に捨てられた義経の首は、しばらくして境川を遡り、金色の亀の背中に乗って、白旗川に流れ着いたと伝えられる。

白旗神社がいつ頃できたのかは定かではないが、建久9年（1198）に、相模の一の宮寒川神社の分霊寒川比古命の来臨を請うたのが始まりと伝えられている。その後、宝法3年（1249）に、奥州平泉で自害した源義経を神社に祭ってある神様に加えられた。

「白旗神社」は、義経の怨霊に苦しめられた頼朝は藤沢奉行の藤沢次郎清親に命じて、首塚から一町ほど北にある亀の小山に社を建てて、義経の霊を祀らせたと伝えられている。

首洗井戸から東方向に450m程行った所には境川が流れており、境川は、義経の首実検行われた腰越の海に注いでいる。首実検の後、片瀬海岸に捨てられた首が上げ潮に乗って首洗井戸近辺に流れ着いたという伝承は、このような土地の状況と符号しており、そのようなこともあるのかと思われる。一般に、白旗神社といえば頼朝を祀る神社であるが、ここは義経を祀っているという大変珍しいケースである。

今回、もっと知りたいと思っていた義経伝説とそれにかかわる白旗神社について調べ、まとめることが出来て満足している。実際に調べてみると、なぜ義経が頼朝と仲が良くなかったのか、義経伝説の始まり、その後どうなったかを義経伝説と白旗神社の関わりをテーマにして深く知ることができた。

今までは友達に誘われて行っていた白旗まつりだが、これからは白旗神社のことを今までより知ったうえで行くことになる、また違った視点で祭りを楽しめることができるのではと思っている。



義経の銅像



鎮靈碑と本殿



首洗い井戸

地域民話研究部門選評

國學院大學教授 花部 英雄

■総評

今年の「地域民話研究部門」の応募作品を読みながら、内容に手ごたえを感じるものと、相変わらずネット頼みの拙い作品にガッカリするものがある。量的には圧倒的に後者であるのが情けない。自発的に作ったものと、別の目的で作ったものを応募するという安易なものとの違いということになるだろう。常に質的向上を目ざすものというコンテストでありたい。

ところで、前回の講評でも触れたことであるが、「地域民話研究部門」における民話の内容と研究について、今一度おさらいしておきたい。新たに応募してくれる人のための参考になることと、入賞できなかった方の見直す材料に生かしてもらいたいからである。

民話とは、庶民が日常世界の中で、現実とは異なる世界に遊び、休息と安寧を与えてくれる芸術的な世界のものといえる。一日の労苦を和らげ、明日への希望や力を与えてくれるものとして、具体的には「昔話」「伝説」「世間話」を指している。「昔話」は「むかしあるところに」で始まり、「めでたしめでたし」で終わる様式性のある物語的な内容で、これに笑話も含まれる。「伝説」は、神仏や巨人などの出来事や、義経など過去の人物の事件、また、山や岩、池沼など自然物に関わる説明的な話が多い。「世間話」は、日常の事件や人の噂の他に、天変地異や死後・異界・妖怪などの非現実な話などである。それぞれに特有の性質を持ち、その用途や機能および目的にも違いがある。

さて、その民話をどのように研究するかであるが、大きく二つの視点がある。一つは民話そのものの研究と、もう一つはその民話の活用という点である。前者の民話研究とは、地域における民話の特徴を明らかにすることであり、その民話がどのように誕生、成長し、また他と比べてどのような地域的特性を持っているかなどを調べることである。

もう一つの民話の活用については、歴史的に伝えられてきた民話を遺産や資源として、その価値を今後に向けて生かしていくという問題である。地域の過去の

歴史である民話を、未来に向けてどのように発信、活用していくかの試みといえる。地域の民話を眠らせておくのではなく地域の発展とともに活性化させいくことは、民話のこれからの大切な役割といえる。こうした趣旨を理解した上での作品作りを提唱したい。

ところで、念のため今年度の審査基準、および評価のポイントを示しておく。審査は次の基準で行なっている。第一に、民話の採集地や伝承地を訪ね、民話のある地域環境や生活上の意味を理解するなどのフィールドワークを行なっているかどうかである。第二に、そのために必要な文献や資料などを精査し盛り込んでいるかということ。第三に、そのようにして得た材料を十分に分析、考察した結果を、自分の言葉で適切にまとめられているかということである。その観点から客観的に行った審査の結果を、以下に報告する。

■団体の部

最優秀賞

「こんなあったけん調べてみた!! 一久谷地区・砥部町の伝承たち」

愛媛県立東温高等学校

郷土芸能部

「初めに」で本研究を「地域の活性化」のための広報を意図したものと、その目的を明らかにしているのは、現在の地域の閉塞状況を高校生なりに心痛めている証拠と受け止めた。その目的を成し遂げるために、三つの伝説を調べ、その中の一つ「衛門三郎伝説」を紙芝居に仕立てて実演し、そのアンケートをとるなど、用意周到な計画で進められている。伝説地でのフィールドワークに加え、そつなくインタビューをこなした成果が、ここに収録されている。地域の疲弊を真剣に考え、それを作品化することで地域の活性につなげようとする発想は、「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストの趣旨に叶うもので、最優秀賞にふさわしい作品である。

優秀賞

『『今昔物語集』 卷三十第十の意識的欠字部分について
～舞台は古代下野国塩谷郡だった～』

栃木県立矢板東高等学校

リベラルアーツ同好会

この研究は国文学的視点による伝説研究であり、高校生の水準を越えているものとして評価される。研究の中心は、今昔物語集の記述から意図的に消されたと思われる「欠字」が、現在のどの地域に相当するのかを、歴史学や民俗学研究の知見を援用しながらの研究である。馬頭観音などをキーワードに、地域の歴史的文脈から問題を追究したもので、説得力のある論旨の展開である。豊富な写真や図表等を用いた丁寧な構成は申し分ない。最後の「結論」部分で、今後の課題が上げられているが、なぜ欠字にされたのかについても課題に加えて欲しい。どのような政治力学（？）が働いたのかも含めて、今後の研究に注目したい。

優秀賞

「『謝文旦』は実在したのか～阿久根から世界へ：海の道の歴史をたどって～」

鹿児島県立鶴翔高等学校

地域文化研究同好会

この研究は、ボンタン（文旦）という果実に込められた地域の歴史事情を解明するための意欲的な追究といえる。16Cの東アジア世界における交易の際に漂着した謝文旦という人物をめぐる民話を、歴史的事実として検証するために、さまざまな資料や関係者への聞き書き、現地調査などを精力的に行なった結果である。結論は「謝文旦」は実在しなかったということであるが、しかし、それよりも郷土の阿久根という地を新たに見直すことになったのは、代えがたい成果といえる。地道で真摯な研究は、研究そのものだけでなく、新たな価値を生み出すものであることを教えてくれる。

佳作

「昔話にみられる日本人や伊豆の人々の精神構造に関する一考察」

静岡県立荊山高等学校

課題研究班

この気宇壮大なタイトルには、少々驚かされた。従来の昔話研究にかかわる研究者には、昔話から地域の「人々の精神構造」を明らかにしようとする発想は浮かばない。しかし、この研究はポイントを押さえて伝承資料を丹念に読み解き、比較の方法を用いて地域的特性を、地名や歴史事項、地理的自然的な環境を組み込みながら傍証していくという方法では一貫している。ただ、残念ながらその研究結果の成否は評者には判断できない。微妙な問題でもあり、ぜひこの研究者の中から、一人でも研究を継続し、いっそうの説得力ある論文へと完成させてほしい。

佳作

「MINWA ～山梨の民話と民話でつながる世界～」

山梨県立甲府第一高等学校

探求2班

昔話は「一民族的な現象ではなく、超民族的な事実である」と、昔話研究者の関敬吾氏は述べた。この前提に従えば、「山梨の民話」という民話はあるのかということになるが、問題を複雑にならないようにするために、民話＝昔話ととらえ、伝説を民話と区別することにしよう。しかし、そんな杞憂はともかく、この研究グループはそうした常識にとらわれず、山梨の民話をジャンルや民話数、内容等から比較分析して大胆に結論づける。細かな反論はあるとしても、こうした先取に富んだ斬新な発想にもとづく研究は歓迎したい。これまでの常識にとらわれない活力は新たな発見を生み出す原動力となるのだからである。

■個人の部

最優秀賞

「日本人と「桜」の伝説について」

愛媛県・済美平成中等教育学校

砂野 光咲

本作品の「目次」を見て、この研究が多様な視点からの緻密な方法によるもので、研究者の桜への並々な

らぬ執着ぶりを感じた。まずは学術用語の検討から出発し、問題の「大宝寺うば桜」を解説し、愛媛県の桜の今昔、日本人と桜、文芸の桜、そして最後には柳田國男の「花咲爺」の桜といった構成には驚かされる。桜を多面的にとらえる態度は、「桜狂い」で有名な中世の西行に勝るとも劣らない。桜を調べることで、日本人の先祖の思考や感性と「つながる」ことを意図していたという感想はよくわかる。華やかな桜を地道に地味なまでに研究する努力に喝采を送りたい。最後に、桜の小説に坂口安吾の「桜の満開の下」も加えて欲しかった。

優秀賞

「河童の甕」

東京都立国際高等学校

井上 万結

この作品は、旅先での爽やかな出会いによる調査報告のレポートである。民俗学という学問は、その当初から調査旅行にもとづいた経歴がある。この報告者は質のよい旅行から、この研究を深めている。伊豆の寺にあった「河童の甕」が、旅行者の目と関心を引いた。レポートは、この甕を所蔵する栖足寺^{せいそくじ}の展示品を手際よく丁寧に紹介する。さらには、お寺の住職が収集した品々を多くの人に発信していることに共感し、この「河童の甕」を通して、さらに多くの人々と「つながる」ことを願うといった優しい心が文章から伝わってくる。

優秀賞

「オランダ観音さま ～馬が繋いだ流山の物語～」

千葉県・流通経済大学付属柏高等学校

坂入 茉緒

この研究は、流山市のオランダ観音をめぐる物語である。オランダ葦毛馬を殺したと伝える伝説を、病死ではないかととらえ、その真偽をたどる研究の旅に出る。オランダ馬、小金牧^{こがねまき}という牧場や、そこに従事する牧士^{もくし}、野馬土手^{のまどて}など関連する歴史用語の解釈は確か

である。現在の地域環境から、かつての牧場を再現する手堅いフィールド調査研究である。そこから福島「相馬の野馬追い」へと考察の範囲を広げていく。ただ、結論がいくぶんあいまいな印象を受けた。問題は「オランダ馬」なのか、「小金牧」なのか、いくぶんテーマが拡散した嫌いがある。

佳作

「北条実時とウナギ井戸伝説」

神奈川県・鎌倉女子大学高等部

田中 美衣

北条氏初代の武将の地位にあった北条実時の「ウナギ井戸伝説」は、一般に広く知られているとは言えない。その点ではマニアックな印象はあるが、それを追究するために北条実時と金沢文庫、称名寺から始まり、伝説の内容を深く掘り下げる。その伝説内容を地形や絵、写真など用いてビジュアルに訴えるなど、わかりやすく図解を心がけたのがいい。しかし、北条実時の歴史記録等に出てこない伝説が、インパクトのある民話風な内容で、後世に伝えられていることは、伝説とは何かといった問題提起をはらんでいるように受け止められる。

佳作

「義経伝説と白旗神社」

神奈川県・鎌倉女子大学高等部

中野 亜美

本研究は、義経が平泉で自害した首の検証（「首実検」）にあたって、首が保管されたとされる白旗神社の「首洗い井戸」をめぐる調査研究である。首洗い井戸や白旗神社の現在から、往時の状況を歴史的にたどり明らかにすることを目指す。ただ、史料の提示が少なく、いくぶん現在の地域環境の概説的な紹介にとどまり、深みに欠けた印象がある。ぜひとも、首が鎌倉に來たことを明らかにする歴史史料を究めて欲しい。こうした伝説研究には、史料（資料）の収集とその精緻な読みが必須要件であることを確認したい。

学校活動部門選評

國學院大學教授 高橋 大助

この部門では、応募に際して2点の条件が示されています。ひとつは、それが「学校活動」と言えるものであること、もうひとつは、地域の伝承文化をテーマにした学びであることです。この二つの条件をクリアしていることが、前提であり、また評価の規準となります。

審査をしていて、いつも、困惑するのは、「学校活動」という点では、大変高い評価をしたくなる作品でありながら、その活動が、伝承文化に学んでいる、とはいえないものにしばしば会うことです。今回も、高校生による国際交流として敬意を表したいものや、地域貢献という点ではもはや質の高い社会活動の域にあるものなど、学校活動という観点からは、入選作より高いレベルにあるものがいくつかありました。しかし、地域の伝承文化に学ぶ、というテーマを満たしてはいたために選ぶことはできませんでした。入選作は地域で伝承されてきた神楽を現代に活かし直そうという試みで興味深いのですが、そこから何を学んだのか、それが今ひとつ伝わらず、佳作以上の評価をすることはできませんでした。

この部門としては、クラブ等の課外活動としてより、学校全体の活動として、教科を横断した総合の時間などを使って地域の伝承文化に学ぶような取り組みや、伝承文化の学びに取り組むことで学校における教科教育のありようが変わる、そんな斬新な活動を期待するところがあるのです。例えば、高等学校国語に新設される「言語文化」の教材として、伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができる、と学習指導要領には書かれています。「言語文化」という科目の目標を、伝承文化の学びを以て満たす、というようなことも、工夫次第で可能なのかもしれません。

学校活動部門選評

國學院大學准教授 飯倉 義之

今年度の「地域の伝承文化に学ぶコンテスト」学校活動部門においては、残念ながら応募作から優秀賞・佳作の選出が適わず、宇部フロンティア大学付属香川高等学校「宇部 伝統芸能文化復興プロジェクト～岩戸神楽舞復興に挑む～」を入選として評価するに留まらざるを得ませんでした。といっても、応募9作品の探求または実践としての水準が低いわけでは決してありませんでした。いずれも意欲的に対象を発掘して探求したり、新たな物品の開発を実践したり、地域、そして全世界に向けての発信を試みたりと、いずれも高校生の活動として意義深く、評価できるものでした。しかし、本コンテストは「地域の伝承文化に学ぶ」であり、その趣旨に添った活動でありつつ「研究」ではない、実践的な「活動」を評価するというのが本部門の評価基準です。

いくつかの応募作は地域の伝承や歴史、ことばを掘り起こし、しっかりと探求していましたが、実践や発信に欠けると判断せざるを得ませんでした。別の応募作は、地域の伝承や特有の作物を取り上げて広く発信する実践に優れていましたが、対象となる伝承の掘り下げや考察が十分になされていませんでした。以上の観点から、本年度は優秀賞・佳作該当作なしと判断せざるを得ませんでした。極端なことを言えば、本コンテストの別部門や、他のコンテストに応募してくれたら十分に入賞するだろうと思う作品もありました。審査員として、皆さんの努力を賞することができないのが残念でなりません。応募してくれる皆さんの頑張りに報いられるよう、学校活動部門の求める作品像を明確に提示する必要を痛感しました。

入選となりました宇部フロンティア大学付属香川高等学校「宇部 伝統芸能文化復興プロジェクト～岩戸神楽舞復興に挑む～」は其中で、岩戸神楽舞の掘り起こしと、webを用いた世界への発信の実践を評価しました。岩戸神楽舞という民俗芸能それ自身の来歴や所作・伴奏・衣装などについてより深く探求し、生徒の皆さんも舞を習得するなどの実践的な参加があれば、より高く評価できたと考えます。

本部門の最終審査結果にかかわらず、応募してくれた皆さんの活動は貴重なものでした。学校単位の活動を、ぜひとも継続してください。